

## 一

「宿業について」という、こういうテーマをいただいたわけですが、あまりテーマらしからぬテーマで、なにか宿業の説明でもしなければならぬのかと思わせられるようなテーマなんですけども、宿業ということについていろいろこの会のお世話をしてくださっている方々が、いろいろ話し合われた中でもう少しそういうことを明らかにしたいというようなことで、私にこういうテーマをくださったのですが、昨日安田先生の十七回忌を迎え、先生を偲んで少しお話しさせていただいたんですが、その中でもうすでにいろいろなことを取り上げて参りましたけれども、人間をですね、生活行為、業ですね。なかなか業という言葉ですね、まあ今日も使われておるわけですから、いろいろ言い換える必要もないかと思えますけども、ただまあ昨日少しお話し申し上げましたように、ともすると業という言葉でなにか運命、あるいはなにかその業という言葉を使って現実をあきらめていく、そういうような意味で言葉がよく使われておりますから、少しこういう生活行為という言葉でとりあえず言い表しておきたいのですが。

その人間を、生活の行為、つまり事実ですね。生活の事実というところに立って、人間の問題を見つめ、そこから人間に与えられておる課題と申しましょうか、そういうことを明らかにしておるのが広くいえば仏教だと、こういうふうにいうことができると思いますし、とくにそのことを取り上げておりますのが『無量寿経』ですね。

そういうことで昨日は『無量寿経』の下巻に取り上げてあるいわゆる「業道自然」ということを少しお話ししたんですが、もちろん下巻に「業道自然」と、こういう言葉が直接出ておるわけではありません。あの「三毒五悪段」と普通呼ばれているところに、いろいろな事がかなり詳しく出ておりますけども、そのいろいろな業によって、まあ業といえば善業悪業とありますけれども、そういう業によって、いわばもたらされてくるいろいろな状況、境遇といってもいいですね。

それを昔から六道というようなことで表されていますので、業によってもたらされてくる六道というような境遇、そういう業によって境遇をつくり、その境遇をかかえて悩んだり苦しんだり迷ったりしておる。そういう人間の生活の事実というものが、いろいろ三毒五悪段といわれておるところに、非常に詳しく取り上げられてあります。

これはまあ昨日も申し上げたことですが、たんに理性的な眼で人間のそういう生活の事実を見つめた言葉がそこにたくさん出ておるのじゃなくて、じつはその大悲の光明の内容だと。つまり人間を引き受けて立つ、現実の身をほんとうに引き受けて立つ、そういう命の働きを言い表しておる言葉ですね。大悲というのは。責任を負うというのは。その大悲の智慧ですね。責任を負うていくものが見い出してきた現実です。責任を負わないものが外からいろいろ見て人間とはどういうものかということを考えたりしておるんじゃないで、本当にその現実そのものを引き受け、その現実そのものを生きる、そういう魂というならそういう魂の眼です。

ですからそういう意味でいえば、私どもはあの三毒五悪段というものを読んで、そういう光明に照らし出されると、そういう大事な意味をもっているところですね。よく曾我先生が三毒五悪段を読みなさい読みなさい、大事ですと一時言われておったことが思い起こされるのですが、これはやはり曾我先生が昨日も取り上げました宿業本能ということをおっしゃられる、こういうことを感得なさったのも、強いていえば、直接経文をお読みになってというように考える必要はないかも知れませんが、三毒五悪段に表れておるようなそういう姿を照らし出される、そういう事の中で感得されておるんじゃないでしょうかね。宿業本能、いわゆる宿業観ですね。「観」という言葉もどちらを使うかということが問題なんですけども。智慧を表す意味では「観察」の観ですね。使った方がいいと思えますけど、しかし感情を表すという意味ではいわゆる「感受」というような、この感情といいましてもたんなる心理学的な意味の感情ではありません。

これはですね、人間の実存と申しましょうか、生存ですね。こうして生きておること、生存そのものを唯

識では「阿羅耶識」という名で明らかにしていますですね。つまり身をもち境遇をもって生きておる。そういう生存ですね。生存そのもの、生存という事実といたしまししょうか。生存という事実を表す働きですね。識という言葉で言い表してあるのは、その阿羅耶識の在り方、阿羅耶識の在り方が非常に特徴をもっておるということを明らかにしておるのが天親菩薩がお書きになったあの『三十頌唯識』ですね。どういう特徴があるかという、その特徴を明らかにしてあるのです。その特色は「捨受」といって、受という言葉が、即イコール情というふうにいえるかどうかということも問題ですけども、ようするに「領納する」、自分に受け取る。領収書の領ですね。受け取る。受け取り納める。その場合に苦として受け取り、受け取るという場合と楽として受け取ると。

いま捨受というのは、平等、苦でも楽でもないですね。安田先生は「平等感情」というふうに言い表していますけれども、ですから平等感情とこう安田先生が言い表しておられるのは『成唯識論』の講義録などにも出て参りますけれども、ただ苦とか楽とか、苦として受け取るとか楽として受け取るというのじゃなくて、どのようなものであろうと、どのような出来事であらうと、それを平等に受け取る、それをそのまま自分の身に、自分自身に受け取っていく。

まあいわば、それを苦だとか楽だとか評価しないということもありますわね。これは阿羅耶識の在り方の特色を表している言葉なんですね。ほかの、たとえば見る、眼識とか、眼、耳、舌、身、意とこうありますけども、こういう識には苦とか楽とかそういうふうには苦として受け取る、何かを見てね、何かの出来事を見て、出来事にふれて、それを苦しいと、あるいは楽しいとかね、したがってそこに苦しいものは避けようとするし、楽しいものだけを取り込んでいこうとするとかといういろいろな計らいがそこに起こってくるわけでしょうけれども、阿羅耶識は、阿羅耶識はということは別の言葉でいえば生存ですわね。生存そのものをもっておる在り方、どんなことでも平等に受け取っていく。

## 二

つまり宿業観というのはそういうことですね。どういような出来事であれ、いわゆる過去世の、宿業という言葉は宿世とか過去世においていろいろな業を重ねてきた。つまりいろんな生活行為を重ねてきた。その生活行為がもたらしてきたもの。あるいはその生活行為に報いて現れてきた出来事。そういう意味が、宿業という言葉が言い表しているのはそういう意味ですけども、宿業として受け取るということは、いわゆる宿業観ですけども、なにかその自分の身に引き受けていく。だから感情というならそういう感情。そういうところに眼を据えて曾我先生が本能という言葉が使われるんじゃないかなあと思うんですけどね。

宿業ということを感じるのは本能なんだと。理知では、私どもの理知分別ではいろんな出来事を宿業として感ずるということはない。本能だけが、生まれながらにして与えられている本能、というようなことを曾我先生がおっしゃるのは、阿羅耶識の捨受という言葉で『三十頌唯識』に言い表してあるですね。そういう在り方ですね、生存の在り方。もう生きておるということがもっておる在り方です。

ただそれが私どもの我執法執で覆われるのですけども。なぜ生存の事実を阿羅耶識と、こう言い表してあるのかといえば、そこから、いろんな経験がそこから起こる。見たり聞いたり考えたりする経験ですね。つまりいろんなことを見たり聞いたりあるいは考えたり、分別思考ですね。それから行為いわゆる業です。見たり聞いたり分別ですね。感覚の分別です。それから第六意識の分別は、これは分別は分別でも、昨日それを取り上げましたけども、「計度分別」といわれるいろいろ推量する。あるいは意味をはかるとかね。だから第六意識の分別は必ず概念があります。言葉で分別する。机とかですね。もう机といったとたんにもう意味づけされておるわけです。机とかいう働きとしてね。そういうようだから分別にも感覚的な分別といろんな意味づけをしていくような分別ですね。あるいは価値判断が入る。善悪とかそういう価値判断がはいつてくるようなそういう分別。不幸とか幸せとかですね。

分別にもそういう内容があります。それから考える、それから行為がありますわね。だいたい業というのは、業ということ自身がもう考えるということをはらんでいるんですけど、古くからこういうふうな三つの

内容で業ということを仏教の学問が明らかにしてきた。「審慮」、いろいろ慮る。行すべきか行わざるべきかとかね。いろいろそこに行くなら行くについてどのようにして行くかと考える。審慮ですね。それから「決定」。決断する。皆さん方がここにお出でになったのもそうでしょう。どうしようかと。いろいろ考えて、まあ用事もあるけどそれはまあ置いて行こうと。決断して。それから決断して「発動」。つまり発動というのが行為とか動作になるのですね。それは身でいえばそうですけども、言葉、口業でいえば言葉になってそれを表していくんですね。

そういう経験です。分別、思考、考える、行為というようなそういう経験がそこから起こる。そして今度は経験がそこに蓄積される。起こるという意味では「能蔵」という。それからそこに蓄積されるという意味では「所蔵」。つまり阿羅耶の三義とって、阿羅耶ということで蔵ということが表してあるんですけど、能蔵、所蔵、執蔵。執蔵というのはどういうことをいうのかといえば、たえず経験がそこから起こりそこに蓄積される。そのようにして生存しておくその生存を我として固執する。私として。つまり固執されるという意味で執蔵。我として固執する働きの方は末那識という言葉で言い表してありますけどね。こういうことでも生存とは何かと、生きておるといふことはどういうことなのかということをもひとつ明確にしている大事な内容じゃないですかね。

とくに私は、曾我先生とか安田先生は『成唯識論』を学ばれてどちらかといえば物語的神話的な表現になっておる法蔵菩薩なら法蔵菩薩ということをもっと基礎づける、あるいは迷いとかそういうような、迷いというけどどういうふうに迷っておるのかですね。ただ物語られて、物語りになっておる悩みとか迷いをもっとはっきり基礎づけていく、そういう大事な意味をもっておるものとして唯識を勉強しておられますですね。

私はそういう点も大いに大事だと思いますし、私も安田先生を通して少しばかりかじっておる程度ですから、そんな唯識を全部了解しきっておるといふわけじゃありませんけど、やはり一体人間存在とは何かというようなことが改めて問題になってきておる時代です。そういう時代でもあるだけに、いま唯識を取り上げているのは心理学の人達を取り上げているんですね。心理学で利用しておられるけども、心理学じゃない、唯識は。存在論です。一体どのような在り方をしているのか、人間存在というけどね。そういうことを明瞭にしておるといふ意味で、やはり新しく学ばれて行く時代が来ておるんじゃないかなあとそういうことを思うんですけども。

### 三

そういうことはともかくとして、法蔵菩薩は阿羅耶識だとかいうふうに曾我先生はいわれるけど、ちょっと一足飛びなんですね。安田先生は法蔵菩薩は凡夫だとかいわれる。それはたえずね、我として執着されておると。事實は。そこのところを押さえておっしゃるわけでしょうけどね。だけどその阿羅耶識ということであらわされておるその魂、その働きです、生存の働き。生存の魂といってもいいのでしょうか。それを法蔵菩薩という名で明らかにしてある。

まあとにかく、受け取ると。どういう出来事であれどういう境遇であれ、それを自分の身に降りかかっておる、自分の身に与えられておる出来事、与えておる境遇として受け取る。それが宿業観というものでしょう。自分の身に与えられておるといふ認識、智慧が宿業という言葉で表現されておるわけですね。だからそちらの方を表す意味でいえば観察の「観」がいいと思いますし、だけど宿業として受け取ると。こういうつまり宿業として受け取るということはそれは自分の身に与えられておるそういう境遇、自分の身に与えられておる出来事として受け止めていく。つまり領納していく。そういう意味では感情の「感」の方がいいなあと思うんですけども、両方重なっておるような意味をもってますわね。

じゃあ感情というのは智慧のない感情かと、そうじゃないですね。宿業として見いだすような智慧です。観は智慧ですわね。智慧をもっておる感情です。まあこれは阿羅耶識の在り方を表すのに五つの言葉で表してあるのですが、その五つの言葉の中に「受」ということがある。受、想、思。ただ受ということが特色をもっておりましてから特別取り上げられておるわけです。普通のヨーロッパの知・情・意というものの考えに

合わせていうなら受（情）想（知）思（意）となります。順序が違います、情・知・意と。ヨーロッパは知・情・意。知がさきです。そういうところがまたおもしろいところですね。受け取ると。受け取るということ、を抜きにして、なにか知るといふんじゃなくて、受け取るということと知るといふことはひとつになって、まあある意味で受け取るということが先行している。

大悲の光明というのはそうでしょう。責任を負うと。衆生を背負うというその魂が衆生の現実というものははっきりと見だしてくる。智慧ですわね。「弥陀の智慧をたまわりて」と『歎異抄』の第十六章に、回心ということを取り上げてあるところに「弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのころにては、往生かなうべからず」といって「弥陀の智慧をたまわる」別の言葉でいえば大悲の智慧ですわね。大悲の智慧というのはどこに表されているのかというならば、まさしく『大無量寿経』でいえば「三毒五悪段」というのは、大悲の智慧が表されています。大悲の智慧が見いだした人間の現実でしょ。「業道自然」という。

なんか傍観者として、人間というものほとんどない生き方をしておるものだというて、外から眺めておるわけじゃない。責任を負うていく。そういうようなことで曾我先生は理知分別ではどうい宿業として観ずると、あるいは宿業として見いだすことは理知ではできない。それは本能だと。本能といっても動物的本能もありますし、いろいろですけども、本来の働きといいますかそういうことが唯識でいえばこういうかたちで言い表されておるんだなあということをお私に思うわけです。

とにかくなかなかですね出来事を宿業として受け止めることができない。だから宿業観というのは言葉は過去世の、宿世。過去世にいろいろ業を積んできたその果報、それによってもたらされてきた事だということを表す言葉ですけども、そんなことを一々考えるのでなくて、具体的には宿業観というのは引き受けるということです。まあ責任感という言葉でおっしゃる方もいますわね。責任を負うと。平凡なことでいえば引き受ける。自分の生きる道として、自分の生きる場所として、自分の生きる出来事として引き受ける。それが宿業観ということで表されておる智慧ですわね。感情でもあり智慧でもある。

これは韋提希が阿闍世に背かれて悩む。ちょうど今日宮城さんが午前中に「厭苦縁」から「欣浄縁」のところをちょっとお話ししていただきましたけども、そのところに九二頁ですが、終わりから6行目の、

世尊、我、宿何の罪ありてか、この悪子を生ずる。

と、こういっていわゆる愚痴をこぼしている。つまり宿業として受け止めることができないでおるわけです。「我、宿何の罪ありてか、この悪子を生ずる」と。過去世において私がどんな罪を犯したんでしょう。犯した覚えもないのに、こういう子どもが親に背くというような出来事が起こったと。つまり阿闍世が親に背いたその出来事を韋提希としてはどうしても受け止めることができない。その事実をですね。まあその愚痴ですわね。事実を受け止められないのを愚痴だといわれます。

そのところを善導大師が取り上げて宿業という言葉でそこに言い表しておられるのです。読むだけ読みますけど、

宿業の因縁何の殃咎ありてか此の兒と共に母子となる。 (聖全一・四八四頁)

つまり母子となる。親子ですわね。母と子の関係ですけども。これは序分義の中にそういう宿業の因縁、つまり韋提希がそういうことが分からずに愚痴をこぼしておるといふ意味のことを善導大師が述べておられますわね。

経典のうえでは「我、宿」といって宿という言葉が出ていますわね。「我、宿何の罪ありてか、この悪子を生ずる」と。受け止められない。もしですね、私どもが理知分別で宿業というようなふうに事実を受け止めたとしたら、そのときは大体あきらめです。引き受けていくというようなそういう意味じゃなくてあきらめ。どうしてみようもない、仕方がないと。そういう意味では無責任です。宿業という言葉が、理知分別が宿業という言葉を使っているときには大体あきらめです。責任を他に転嫁しておる。それを運命とかね、他因論といいますけど。これはなかなか出来事、いろんな出来事を宿業として受け取るということがなかなか容易でない。

これは昨日も申しましたように、少なくともナンマンダブツの道はそういう受け止めることのできないそういう私どもに宿業として受け止める智慧を回向する。大悲の智慧ですわね。いわば宿業として現実を受け

止めていくようなそういう身に呼び返す。そのことがナンマンダブツの道において大事な、そのことがはっきりしないと現生不退ということは成り立たないわけです。

#### 四

そういう意味で昨日もお話し申し上げましたように、曾我先生は真宗再興の時期と。じゃあ再興というのはどういうことが具体的に大事なのかということで機の深信ということを非常に、別の言葉でいえば宿業観です。機の深信と宿業観と同じことですけどね。

『歎異抄』の十三章に宿業という言葉が直接出ておりますけど、

卯毛羊毛のさきにいるちりばかりもつくるつみの、宿業に あらずということなしとしるべし  
しるべし、という言葉があるということが受け取れないことを表している言葉ですね。しるべし。まさに大悲が表されている言葉です。知らなければならぬというような、なんか人に押し付けがましくね、どんなささいな、「卯毛羊毛のさきにいるちりばかりも」といったら、どんなささいな事もということでしょう。どんなささいな生活行為、朝起きる、食事、仕事に行く、あるいはいろんな人といろんな関係を結ぶ。結婚する、結婚するのはささいな出来事ではないかもしれないが、まあそういうような、子どもが生まれるとかね、それが生活行為です。

善導大師は結婚については非常に重い業縁だということを言い表していますね。

宿縁業重くして久しく近づきて夫妻なり。

(聖全一・四七四頁)

序分義の禁父縁のところに出ている言葉です。生まれるということも業縁だという意味を表すのに、「自の業識」という言葉を使って、これはやはり序分義の「散善顕行縁」のところに出ている言葉ですけども、

自の業識を以て内因と為し、父母の精血を以て外縁とす

と。つまり業縁として取り上げておられるのです。業縁。そしてまた業ということが、生活行為というものがたんなる個人というものじゃないですね。いろんな人と関係をもっておるものです。こうして私どもがここに来ておりますのもそれは一応自分で決断してきたと。だけど私どもに決断させておる縁があるわけですね。決断を妨げない。だからただ個人の、私の個人的な業というものじゃない。もうその個人的な業というものは極端な言い方をすればほとんどないといっているくらいですね。ぜんぜんないわけじゃないですけど。もういろいろな縁が折り重なっておる。顔を洗うということもそうでしょう。長い間の人間の業縁ですわ。人間の生活行為です。久しい昔からの、宿世の業縁といってもいいでしょ。久しい昔から顔を洗ってきた。その業縁に促されて、業縁の出来事です。

そういうことに気がついたときには、業縁がですね、いわゆる宿縁に転ずる。気がつかなければ宿縁にも宿善にもなりませんけど。宿善という言葉は蓮如上人がよく使われますね。「宿善開発」。私どもがこうして法を聞く場所に足を運ぶということ、それは内面的には一人一人の決断ということがありますが、しかし決断だけで事が成就しておるわけじゃない。それを促してきた長い歴史もあるし、直接に現在ただ今ここに出掛けてくることを支えておるそういういろいろな縁があります。そういうことの全体に目覚めたときにその業縁が宿縁に転ずる。「遠く宿縁を慶べ」とかですね。親鸞聖人がおっしゃる。

そういう、わざわざ宿業観という言葉を使わなければならぬこともないかも分かりませんが、ほんとにいろんな出来事、あるいはこうして人間に生まれてきた。人間に生まれてきたといっても、ただ人間じゃありませんわね。誰かの子として生まれてきた。いろんな境遇を抱えています。時代社会もあるし、狭い範囲では家族とかね、そういう境遇を抱えておるそういう身ですね。なにか自分にとっていらんものがくっついていなくて、ほんとに私どものうえに生きるということを成り立たせるような、道を開くような、そういう意味をもっておる大事な縁が重なっておるわけでしょう。

そういうことを引き受けるという、そういう智慧を失って、何か人間ということだけを考えようとする。そういう業縁ということから離れたら人間存在といってもなんにもなんにも意味がないんじゃないですか。別に生きてなけりゃならぬという意味はどこにもありゃしません。尊いという意味もないでしょ。そもそも尊

いというような、人権尊重とかね、人間が尊いというような思想というものは、これは神によってつくられたという背景に立って、そういう思想というものが出てきておるわけですね。神様が造ってくださった。世界についてもそうでしょ。神がこの世界をまず造られた。だからその世界をいたずらに汚してはならぬ。キリスト教が倫理的なのはそういうところにありますね。倫理的というのは善悪、悪を除いて善を求めていく。そういう傾向が非常に強いのは、神様が造られた世界、神様が造ってくださった人間。そういうところから出てくる一つの眼差しじゃないでしょうかねえ。自然現象としてみたら、つまり生物の中の一つ、自然現象としてみたら尊いなんてありやしません。自然現象。DNAを研究したって尊さは出てきません。たんなる物の働きであって。だから命の尊さが分からないというようなことは大きな問題を提起している時代じゃないですかね。若い人たちは命の尊さが分からんとかいうけど、大人の方はどうなのかとなりますと分かっているのかと。なんかね、尊いということが自明のことになっておる。そんなものは考える必要もないほど、尊いにきまっておるというですね、何が尊いんだか分からない。

これは有り難いということでもそうですよね。有り難いと何が有り難いのか分からないままになって、有り難い有り難いと。なんとなく幸せになるのが有り難いのかですね。だから有り難いということも非常に功利的な意味で使われていることが多いですね。「人身受け難し」人間に生まれてきて有り難いと、こういわれるのはなにも功利的な意味じゃないですね。幸せだからとかそんなことじゃないでしょ。もしかすれば、体が不自由な体をお願いして生まれてきておるかもしれない。あるいは体の方は健康であっても、家庭の境遇とか、世の中とか、時代社会とかいろんな問題が重なって起こるようなそういう場所に生まれてきておるです。

そういう意味では私はあらためて人間とは何かと。命は尊いとかいわれるけど、尊さとは何かというようなことがあらためて問われておる時代じゃないでしょうかね。うかうかと若い人たちはそういうことを知らないから教えんならんなにか分かつとるつもりです、その尊さをね。尊いんだ尊いんだといえば分かるという問題ではないでしょ。そういう大事なことが取り上げられておる時代じゃないでしょうか。そういう意味であらためてですね、こういう宿業という言葉です、明らかにされてきた、生きておることの「責務」ですね。「つとめ」といってもいいですけど、あるいは「使命」でもいいんですけど。そういうことをじつはいろんな問題にぶつかりながら繰り返し繰り返し反復するようにして見いだしてきた。ただいっぺん見いだしたらそのままというのじゃなくしていろんな問題にぶつかってはまたあらためて人間に与えられた責務を見いだす。ある意味で七高僧の歩みはそういうことを表しているといっているいいですね。反復されてます。ちょっと休みます。

## 五

さきほどの韋提希のことですけれども、韋提希は自分が直面した、その出来事が引き受けられない。自分の身に受け止められない。こういうことが、つまり宿業として受け止められないでおるということを善導大師が解釈しておられるわけです。ですから現実が受け止められないから未来に、願生心が起こるんですけどその願生心は未来を求めるわけですね。現在はもうどうすることもできない。現在を受け止めることができない。ですから「未来に悪声を聞かじ」といって、韋提希の中に開かれてくる浄土を願う心というのは、未来に救いを求める。『観無量寿経』というのは未来に救いを求めるそういう韋提希の心に応じながら、むしろ韋提希が現実そのものを受け取りきれずにおる、そういう韋提希の心というものを反省させる。それが後から出てくる三心ですね。「一者至誠心、二者深心、三者回向発願心」と。

まあそういうことを見ても分かりますように、現在ただ今が受け取れない。したがってそこに未来に救いを求める、理想世界を求めるとする場合もあるし、自分が安楽になるそういう世界を求めるとか、まあある意味では、功利的な要求です。そういう功利的な要求を拒まずに積尊が韋提希の求めに応じて何をなせばいいのかという、韋提希の求めに応じて行が説かれていきますが、じつはその全体が韋提希の中にほんとに現実そのものを受け止めていくような、そういう大悲心というものを韋提希の中に成就していく、そういう仏

陀の方便といえますか恩徳というものが『観無量寿経』には表されております。

そういうわけで昨日ちょっと取り上げましたように、曾我先生が機の深信、いわゆる宿業観ですね。ほんとに現実を引き受けていく。そういう智慧が開かれると。そういう智慧が開かれなければ、現生不退ということは成り立たない。浄土往生といっても、未来に救いを求めるということは、それがそのままであると、やがてそれは功利的な要求というものがそこにあるわけですから、結局ですね、外道に転落していく。たんなる理想追求、たんなる幸せ追求の道に転落していく。ほんとに我が身に目覚めるというようなことは抜け落ちてしまいました。

これは非常に端的なことを『口伝鈔』で取り上げております。六六九頁にやはり宿業ということを取り上げてあるところですけども、6行目です。

前世の業因しりがたければ、いかなる死の縁かあらん、火にやけ、みずにおぼれ、刀剣にあたり、乃至寢死までもみなこれ、過去の宿因にあらずということなし。

そこに「前世の業因」という言葉でいわば宿業ということを表してある。こういうことはうっかりしておりますと妙な話じゃないかということになりますね。火事に遭うのも過去の業縁だと。あるいは溺れるのも、刀剣、この時代は刀で殺されるということがありますから、殺されたりすることも、あるいは人を殺したりすることも、その内容でしようけど、それから寢死というのはどういう死に方か知りませんが、寢たままでしょうかね、とにかくようするに、そういうふうにやけどをしたり火事にあたり水に溺れたり、あるいは戦争で殺されたり病気で死んだりということかもしれないね、寢死というのは。それが過去の宿因にあらずということなしと。

なんかこういうことも、前世にこういうことがあってこうなっておるんだと、そんなことを言おうとしておるんじゃないかと、しかしこういうこともうっかり読んでおりますと、そんな変な話があるかというような、理知的にとらえればね。大事なことは引き受けるということでしょう。過去世の宿縁とか過去世の業によってもたらされているんだということをわざわざいうのは、この現実自分に向けられておる、自分が引き受けていく、そういう出来事なんだと。こういうことを言い表しておる。いわゆる智慧ですわね。自分が受け止めていく、そういう出来事だと。

これはまあお聞きになったことがきつとあると思いますが、安田先生のところは隣から火が出て火事になりました。安田先生が住んでおられた相応学舎なんですけども。その後ですね、宿業ということが分かったよと。焼かれたんでなくて焼けたんだということが分かったと。このようなことをよく言っておられました。時々はなしに出しておられました。つまり引き受けるということですよ。焼かれたといんじゃないに、焼けたんだとこういわれるのはもう事実、自分の身の事実として焼けたという事実として、人から焼かれたという事じゃないに。

いわばそこが出發するところですよ。歩み出すところですよ。そういう意味でまさに安田先生はまたそこから歩み出して行かれました。焼かれたという悲しい顔をしているのでなしに、焼けたというところから歩み出して行かれました。なかなかそれがいろんな出来事の中で、とくに今日は権利の問題とかいろんな事が出てきますから、損害賠償とかそういうことと重なり合っとなかなかデリケートな問題ですね。もちろん損害賠償とかそんなことする必要はないとそこまで考える必要はないと思いますけど、問題は態度ですよ。ただ人から被害を受けた、たんなる被害者意識に止まっているのでなくてね。

まあそういう意味でいえば水平社宣言なんか素晴らしいですよ。たんなる被害者意識じゃないです。差別を受けてきたという、それは被害を受けてきたという、我々は被害者だと、たんなるそういうことじゃないですよ。ほんとに人間の業、人間の問題が与えられておる。何かそういう大事な出来事に自分たちはぶつかっておるということであの水平社宣言というものは書かれています。別にあの中に宿業観とかそんな言葉が出てくるわけじゃないけど、流れておるのはそういう智慧ですよ。

つまり有り難いとかそういうような意味もそこにしかないのじゃないでしょうか。そういう智慧を賜るという。そういう智慧を賜ることによって、いわばさまざまな現実を本当に引き受けていくような歩みがそこから始まる。

清沢先生の「現前の境遇に落在する」ということがいわゆる宿業観を表している言葉ですわね。「現前の境遇に落在する」。よく安田先生が、凡夫が菩薩たらしめられるということをよくおっしゃっておられますけど、現前の境遇に落在するのが菩薩です。凡夫の身であってそこに菩薩たらしめられるというのは、凡夫は現前の境遇に落在できない。いろんな業縁に動かされておるけれども、業縁に動かされておりながら、そのことを全然知らないわけじゃない。子どもが生まれれば親になってね、子どもの世話に全生活を傾ける。つまり業縁に動かされている。しかし業縁に動かされて、そういうことがあらゆる面にたくさん出てきますわね。業縁に動かされておるとは言いながら、じゃあ業縁に随順しきれるかという随順できない。そこにやはりいろいろな我執、法執、いろんな分別が出て参ります。親鸞聖人は、

如来の御恩ということばをばさたなくして、われもひと、よしあしということばのみもうしあえり。

(聖典六四〇頁)

これは親鸞聖人の言葉というより『歎異抄』の著者の言葉でこのように言い表してありますね。善悪、是非、正邪、福禍、吉凶、得損、真偽。いろいろありますが、「よしあしということばのみもうしあえり」というこの善し悪しということばは、ただ善悪だけじゃありません。是非、善悪、邪正ですわね。それから真偽も入りますでしょう。本当か嘘か。正か邪か。幸せとか禍とか。とんでもない禍を受けたとかね。

なかなかやっかいなんですわね。そういうふうにとんでもない禍、とんでもない損をしたとかね、被害を被ったとかね。そういうふうが悪しとして受け取る場合と、善しとしてね、受け取っていく。そういう善し悪しを分別する。善し悪しを分別して善きことを求める。悪しきことを嫌う。つまり現実の出来事をそのまま受け取るということができない。ここで「如来の御恩ということばをばさたなくして」という如来の御恩ということばはそれこそ大悲の智慧でしょう。宿業観です。現実に立つことのできない私どもを、現実に立たたささせてくださる。現実に立つことのできる、落在することのできるようなそういう智慧を回向してくださる。信心ですわね。それがいわば一大事。それが我らの一大事であるにもかかわらず、「如来の御恩ということばをばさたなくして、われもひと、善し悪しということばのみもうしあえり。」

そういう善し悪しの分別に腰を下ろしてしまう。つまり現実をそのまま受け取れない。それを親鸞聖人は「屍骸」という言葉でいっている。生ける屍です。「行の巻」に宮城さんが取り上げてくださっている「一乗海」の「海」というのはたらきの方ですわね。一九八頁ですけど、8行目に、

願海は二乗雑善の中下の屍骸を宿さず。いかにいわんや、人天の虚仮邪偽の善業、雑毒雑心の屍骸を宿さんや。

二乗雑善の中下の屍骸というのはいわゆる煩惱から解脱する。いわゆる悟りを開くというね。「中」というのは縁覚を表している。「下」の方は声聞ですわね。煩惱を断ずる。煩惱を断じて涅槃を証する。煩惱が断じられたらもう歩み始めるということはなくなりますわ。生ける屍です。悩みがなくなったら問題がなくなるわけですからね。問題がなくなるということは生ける屍です。よくですね、「もう悩みもなくなりました。年を取りましてね。」ということばをふっと漏らされるけど、それはそれで結構ですけど、じつは生ける屍でしょう。屍骸です。魂を失っておる。もちろんこの魂とは大菩提心ということばで表されるそういう魂ですわね。

悟りのことは「二乗雑善の中下の屍骸」ということばで言い表してありますが、その後「人天の虚仮邪偽の善業」これは悪を恐れる。何か出来事について悪を恐れる。悪をなくさなきゃいかんというて悪を恐れる。不幸を恐れるとかね。そのためにいろんな善根を積む。そういう善いことを行おうといっても、善悪にしてもですよ、悪を恐れるという意味でなされていく善。それを人天の虚仮邪偽という言葉で言い表している。善は善でもそれは虚仮の善。邪偽の善。毒を含んでいる。ここでは毒という言葉は後の雑毒雑心の方に使っていますけどね。善導大師は「虚仮の行雑毒の善」といって善に雑毒の善と。毒というのは屍にするものを毒と。人を殺してしまう。それは悪を恐れて、不幸を恐れるとかね。つまり不幸の現実を本当に受け止めようとしない。たとえそれが不幸であれ、現実が現実。それを本当に受け止めてそこに与えられておる課題が

あるわけですから。それを離れてなにか不幸を避けようと避けようとする。そういうような形でなされていく善を虚偽邪偽とね。善は善でも功利的ですわね。邪偽というような。

現実を本当に受け取ろうとしていない。現実というのは厳粛な事実でしょう。たとえそれが悲惨な出来事だとか不幸な出来事だとかいってもね、それはそれで大事な出来事でしょう。生まれるということもそうだし、死ぬということもそうでしょう。死ぬということも厳粛な事実ですわね。厳粛な出来事として受け止めに避けようとする。「雑毒雑心」の方は、これは善を求める方です。善といってもただ倫理的な意味じゃない。幸せとか楽になることとかですわね。

つまりいずれも現実の事実そのものを受け取ることができない。現実の事実そのものを受け取る。そこから出発しているのが大菩提心です。とくに浄土の大菩提心というような言葉で言い表されているのは。現実を担うというようなですわね。そういう屍を生き返らせる。宿さずというのは屍を拒否しておるのじゃない。

人間のもっている業といえば業ですけども。苦しければ毒でもいいんです。毒をも好むというようなね。そういう人間を見捨てない。毒を好むような人間はだめだというんじゃないですわね。だから宿業観という言葉で表されている大悲の智慧はですわね、そういう屍になってしまう、まったく大菩提心というような魂を失ってしまう、屍のような、生ける屍になっているそういう者を本当に背負って、それこそ運命をともにして、生き返らしていく。もちろん生き返らせていくといっても、生き返える可能性があるからと、そういうことじゃないですわね。限りなく運命をともにするというかたちでその屍骸になっておる者を見捨てない。

## 七

こういったことも宿業観ということで表されておる大悲の智慧の大事な内容でしょ。そういう智慧を賜る。人間に生まれてきたことの有り難さというものじゃないでしょうか。それはただ有り難い有り難いという言葉でも言い尽くせないですわね。そういう大事な問題が宿業ということで取り上げられておる。そういう宿業観という智慧が開かれることによってはじめて、あらゆる人々と業を共にしておるそういう感覚ということも開かれてくるのでしょ。ですから親鸞聖人が『歎異抄』では第五章に「一切の有情はみなもって世々生々の父母兄弟なり。」と、ああいうふうに一切の有情を父母兄弟、有情は生きとし生けるものということを表しておるといっていいわけですが、ただそれだけじゃなくて、迷いをもっている。有情ですわね。迷ったり悩んだりしておる。父母兄弟として共感する。そもそも親鸞聖人が現実の身を表されるときに「一切群生海」とか、たんなる個人の身という表現じゃないです。必ず「群生」とか重なってます言葉が。

とくに今日宮城さんが取り上げてくださった「竊かにこの心を推するに」というところに出ておられます言葉でも「一切群生海」です。たんなる他人のことをおっしゃっておられるのじゃないでしょ。どんな人でもみんなこうなんだというて、人のことを言っておられるのではない。「一切群生海」という言葉の中には親鸞聖人ご自身が一切群生海として見いだされているわけでしょう。ほんとにいろんな人といろんな縁を結んで生きている。それ以外の何物でもない。

だから「一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし」とかそういったことが、たんに人の話をしておられるわけじゃないですわね。一切群生海といっても。人の話なら失礼な話じゃないですかね。どんな人でも清浄な信はないんだ、真実の信はないんだなんていったら、偉そうなこと言われませんか。逆に身のほどを知れと。「信の巻」のここだけじゃありません。二一頁の終わりから4行目に、「常没の凡愚・流転の群生」とこういうふうな群生ということが重なってますでしょう。凡愚の方は一人一人を表す言葉と言ってもいいんですけど、「流転の群生」と。そういうことは取り上げたら山ほどありますけど、二八〇頁の「煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌」。親鸞聖人は、ご自身の言葉のときは、人間という言葉は使われません。文類の中には「人身」という言葉が出てきますが、こういう「群萌」とか「群生」とか、こういうことがそもそも業の世界、大悲の智慧に触れることのできた、大悲の智慧をいただいた、そういう眼がご自身についてもたんなる一個の人間というのでなくて、一切群生海と。だから本当の意味で長い歴史をもち世界を抱えておる。

だからたんなる一個の人間というのでなくて歴史を抱え社会を抱えて、また仏教の歴史がここから生まれ出てきておる。そういう大事な身をいただいております。一口に凡愚といっても凡愚から仏道が生まれ出ておるわけでしょう。そういうことを明らかにしてくださっているのが親鸞聖人の仏教の歴史ですわね。親鸞聖人が明らかにしてくださっている仏教の歴史というのは、凡夫とか群生海という言葉で表されている人々と離れている歴史ではない。

まあいってみればそういう衆生を父母としているような歴史です。魂の歴史。父母という言葉も私どもの方からいえば「釈迦弥陀は慈悲の父母」というような父母という言葉ですけども大菩提心の方からいえば、衆生が父母なんでしょう。父母として愛し敬う。だからもし尊いという言葉を使うならそういう意味の尊さですわね。父母とされている尊さ。『大無量寿経』に「純孝の子の父母を愛敬するがごとし。」とあって『大無量寿経』の会座に集まられた菩薩の精神というものが言い表されておりますけども、6頁ですわね。そこで父母といわれているのが衆生のことです。衆生を父母を愛敬するがごとし。純孝の子というのは親に孝養を尽くすということがもう、生きることのすべてになっておる。そんな人はこの世にはいらっしやらないかも分からないけど、親に孝養を尽くすということが生きることのすべてになっておる、そういう純孝の子が父母を愛し敬うがごとし。衆生につかえる、父母としてね。

つまりなんといいますかね、法といっても人を支配するようなそういう法ではなくて、人に従う、機に従うといいますかね。だからもし父母という言葉を使うなら、たがいに父母でしょ。私どもが父母といわれて親のような顔をしているのでなくて、私どもの中に大事な智慧を育ててくださる父母として釈迦弥陀が仰がれる。釈迦弥陀の方はただ私どもを指導する立場に立っているのかということそうじゃない。むしろ衆生を通して、衆生を父母のごとく、衆生を通して、弥陀の本願といたって衆生を通して衆生に応ずるかたちで、昨日ちょっとお話ししましたが、展開していく。機に応じてですわね。

まあそういうところに本当の意味の言葉では言い尽くせないような有り難さ尊さ、たとえ自分では有り難いとも尊いとも思えなくても、ほんとに尊び敬ってくださる、そういう方々が善き人々、善き友でしょ。自分では有り難いとも思わないでも、そういう意味の有り難さ尊さというものがあらためて掘り起こされてくる、そういう時代を迎えているのではないのでしょうか。まあ宿業というテーマを与えられてそんなことを考えさせられました。